

編集後記

中村学園大学 流通科学部

山田 啓一

2020（令和2）年は、新型コロナウイルス（COVID-19）で始まり、それで終わる年になりそうである。本研究所および研究員個人の活動も現地調査を中心として自粛を余儀なくされた。もちろん、文献調査など、移動を伴わない調査については、むしろ時間がとれてじっくりできたという側面もあった。研究活動で大きな変化といえば、セミナーやワークショップ、学会の全国大会、部会の研究会などのオンライン化が進んだことであろう。

現場での質疑応答や懇親会などで親交を温めるといった対面でのふれあいができないという寂しさもある一方で、わざわざ時間をかけて出向かずに済む、移動の要がないのでフレキシブルにスケジュールを組めるといったメリットも改めて認識することができたと思う。

アフターコロナの話をするのは時期尚早ではあるが、ウィズコロナの現在の生活の中で、創意工夫して新しい方法を考え実行し、それをアフターコロナに活かしていくこと、単純にビフォアコロナに戻るのではなく、新コロナ禍を超えてよりよいものにしていくことも大切なのではないだろうか。

ワクチンの治験が進み、かなり期待が持てるような結果も報告されているが、それが実用化されるにはまだ当分待たなければならないだろう。新型コロナウイルスのパンデミックの第3波を迎えようとしているが、みなさまのご健勝をお祈りするとともに、私たちが何とかこれを乗り切り、次号の編集後記では、明るい未来の話ができることを願ってやまない。